

民数記を学ぶ (1)

塩 野 和 夫

第1章 共なる歩みを 民数記1章1節～2章34節

1 民数記の主題

(1) 問い — 出発20日前 —

エジプトを出立し、イスラエルは当面の目標であったシナイ山に3か月かかって到達した。シナイ山は最終の目標地ではなかった。しかし、十戒と幕屋を与えられたのはシナイに滞在した時である。そうして、民数記1章1節にある通り翌年の2月1日を迎えた。10章11-12節には「第2年の第2の月の20日のことであった。雲は掟の幕屋を離れて昇り、イスラエルの人々はシナイの荒野を旅立った。雲はパランの荒野にとどまった」と記されている。

シナイ山における休息の時を終えると、2月20日にイスラエルは本格的な旅に出た。荒野での宿営と行進を続ける旅である。そうだとすると、2月1日はいよいよ荒野への本格的な旅に出る20日前になる。20日前といえば、最終的な準備にあたらなければならない時である。

そこで、イスラエルが本格的な旅に出るにあたって必要なものは何であったのか。集団として40年近い荒野の旅を続けていくために必要なものは何であったのか。それが共同体としてイスラエルを整えることであった。各自がばらばらに行動したのではとても荒野を旅することはできない。共同体として整えられねばならない。もちろんすでに十戒を与えられ、幕屋が備えられている。その上で、共同体として旅を続けていくために必要な一切をこの20日間で準備しなければならない。

こうして共同体として整えられ、荒野を旅し、ついに目的地に到達する。これが民数記の扱っている出来事である。

(2) 共同体 — 民数記の主題 —

民数記の主題は共同体である。そこで、「共同体」という観点から民数記を概観しておきたい。

民数記の1部（1章1節～10章10節）はシナイにおける20日間にわたる旅の準備を描いている。イスラエルが共同体として整えられたのはこの時である。

共同体として整えられたイスラエルが整然として荒野の旅に出かける。そして、40年近い旅路の後にカナンに到着した。2部（10章11節～20章13節）がこの旅路を扱っている。共同体として整えられていたからこそイスラエルは40年近い旅を続けることができた。しかし、その間にさまざまな問題が生じ、共同体の危機にも陥った。イスラエルの力では解決できない危機である。不信仰のため旅路を誤ったこともある。そのような過ちにもかかわらず、イスラエルは40年近い旅路の後に目標の地に到着している。何がイスラエルを支え、導いたのか。共同体を支えた存在が明らかにされている。

3部（20章14節～36章）はヨルダン川東岸における定住を描いている。ヨルダン川を渡り、カナンの地に入ったわけではない。しかし、ルベン・ガド・マナセの半部族がカナンの東の地に定住した。それはイスラエル全部族がカナンに定住する様子を前もって語っている。

このように共同体であるイスラエルの形成、歩み、帰結を民数記は描いている。

(3) 1部「共同体の形成」の構成

テキストの学びに入るにあたって、1部「共同体の形成」の構成を確認しておこう。

1 人口調査と配置（1章～2章）

1章と2章では人口調査と配置を記している。イスラエルの全部族の人口、ただし20歳以上の成年男子の人数が数えられた。その上で、幕屋を中心とした各部族の配置が決められる。イスラエルはこの配置によって整然と旅を続けた。

2 レビ人の召集（3章～4章）

次いで、レビ族の人数が数えられる。彼らには聖所を司る職務が命じられた。

3 諸種の規定(1) (5章～6章)

いくつかの規定が記されている。これらは大変古い伝承に基づいていると考えられている。

4 部族の指導者の献げ物 (7章)

各部族の指導者が代表して献げ物をしたことが報告されている。

5 種々の規定(2) (8章～9章14節)

諸種の規定が続く。ただし、「諸種の規定(1)」が一般人を対象としていたのに対して、「諸種の規定(2)」はレビ人や過越しの祭りの規定、要するに祭儀に関する規定を扱っている。

6 シナイ出発 (9章15節～10章10節)

共同体として整えられたイスラエルがシナイを出発する様子を描いている。

2 共なる歩みを 1章～2章

民数記1章～2章から学ぼう。

(1) 人口調査の命令 1章1～16節

共同体の形成にあたって人口調査が命令された。「イスラエルの人々の共同体全体の人口調査をしなさい。……兵役に就くことのできる20歳以上の者を部隊に組んで登録しなさい」(2～3節)、「部族ごとに一人ずつ出してあなたたちの助けをさせなさい」(4節)と言われる。なぜ、20歳以上の男子だけなのか。なぜ、兵役なのかという問いは一切ない。

ただ、長い旅に出るためには外敵と戦う者の人数を知ることがあらかじめ必要とされたのであろう。

(2) 人口調査の実施 1章17～19節

神の命令を受けて人口調査が実施された。各部族の指導者が協力者として人数を数え登録する。何日かかってどの程度正確な調査が行なわれたのかは分からない。いず

れにしてもイスラエルにおいて公的な初めての人口調査である。

教会にも教勢という言葉がある。会員数と礼拝出席者数を中心とした教勢によって、当該教会の量的規模を知ることができることとされる。教勢は教会を知るバロメーターである。

イスラエルも旅に出るにあたって、人口調査を行った。

(3) 人口調査の結果 1章20～46節

人口調査の結果が12部族ごとに記されている。次の通りである。

ルベン族	20歳以上の男子	46,500人
シメオン族	20歳以上の男子	59,300人
ガド族	20歳以上の男子	45,650人
ユダ族	20歳以上の男子	74,600人
イサカル族	20歳以上の男子	54,400人
ゼブルン族	20歳以上の男子	57,400人
エフライム族	20歳以上の男子	40,500人
マナセ族	20歳以上の男子	32,200人
ベニヤミン族	20歳以上の男子	35,400人
ダン族	20歳以上の男子	62,700人
アシェル族	20歳以上の男子	41,500人
ナフタリ族	20歳以上の男子	53,400人
12部族合計		603,550人
総人口		約2,500,000人

人口調査で得られた20歳以上の男子の数は60万3550人である。これは戦争に出ることのできる人数なので、20歳以下の者、女性それに高齢者の男性は含まれていない。そこで推定される全人口は250万人とされている。250万人をめぐる種々の議論がある。まず、当時の状況を考えると「250万人の人たちが荒野を40年間も旅することはありえない」という意見である。それでは「どれくらいの人数であれば可能か」とい

うと、「せいぜい、5000人から6000人だ」とされている。この前提から2つの解釈が出されている。一つは「千」という文字がもともと「群れ」とか「家族」を意味したという解釈である。この解釈によると6万人は6千人に、250万人は2万5千人になる。また、ヘブライ語の子音は数字を現したので、「この場合もそうではないか」という解釈もある。

(4) レビ人の務め 1章47-54節

人口調査の際にレビ人は入っていなかった。理由は述べられていない。ただし、レビ人に対しては「レビ人には掟の幕屋、その祭具および他の付属品にかかわる任務を与え、幕屋とすべての祭具の運搬と管理をさせ、幕屋の周囲に宿営させなさい」（1章50節）と命じられている。戦いに出なかったのでレビ人の人数は数えられなかったのかもしれない。あるいは直接主の御用にあたる者は数えなかったのかもしれない。ただし、後にはレビ人の人数も数えられている（3章14-20節）。

(5) 旗のもとに 2章1-31節

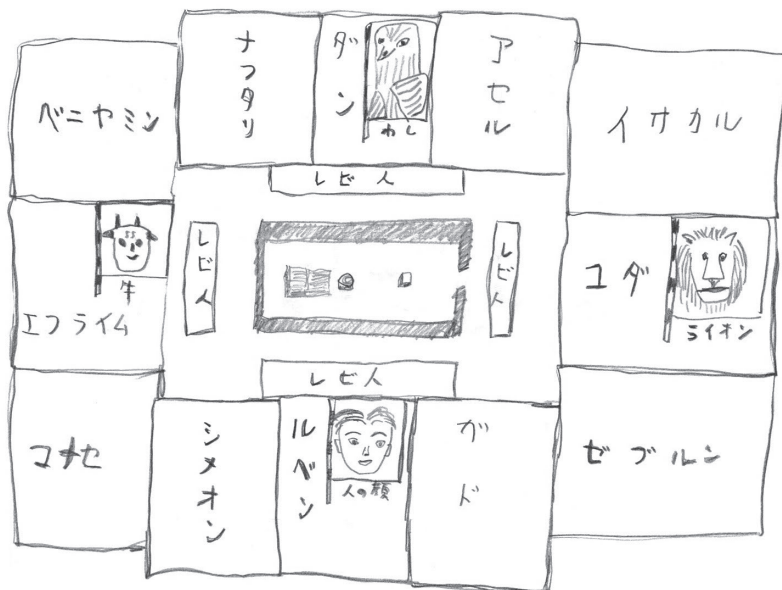
人口調査を終えると部族ごとに配置の命令が下される。

幕屋を中心にして、その周辺にはレビ人が配置された。幕屋の東にはユダ族のライオンの旗が立てられ、ユダ・イサカル・ゼブルンの各部族が配置される。西にはエフライムの牛の旗が立てられ、エフライム・ベニヤミン・マナセの各部族が配置される。北にはダンの鷲の旗が立てられ、ダン・アシェル・ナフタリの各部族が配置される。南にはルベンの人の顔の旗が立てられ、ルベン・ガド・シメオンの各部族が配置される。このような配置によってキャンプして休み、整然と旅を続けた。

配置には2つの特色がある。第1は幕屋を中心にした点で、すべてをまとめ結ぶのが礼拝をする場所だった。これは「巡礼の旅にも似ている」と言われる。礼拝を中心に共同体をまとめ、神から与えられた約束の地を目指す。これが荒野の旅の本質だった。

もう一つの特色は「旗のもとに集まる」ことである。大きな目的を達成するためには、それぞれの部族に属し責任を担うことが必要であった。旗のもとに集まるのは「軍隊に似ている」と言われる。軍隊は戦いのために最も有効に最大限の力を発揮できるように組織されている。

イスラエルも一つの目的を達成するために共同体として軍隊のように集まることを求められていた。



宿営の図

(6) まとめ 2章32-34節

2章32-34節が「人口調査が行われたこと」、「部族ごとに数えられた人数のこと」、「旗に従って配置されたこと」を記して、1・2章をまとめている。

3 2つのしるし

民数記1-2章から学ぶことを整理しておこう。

(1) 共同体への必然

まず、共同体への必然である。いよいよ荒野への旅に出る時にイスラエルには共同体として整えられる必然があった。約束の地に到達するには長い旅路があり、敵との戦いを初めとする多くの困難が予想された。だから、ばらばらであってはいけない。

教会も同様である。一人ひとりの魂の救いが強調される。もちろん、個人の救いは基本である。しかし、教会は共同体なのである。「御国を来させたまえ」との祈りを

掲げて、荒野にも似た現実社会を生きていく。だから、ばらばらであってはいけない。教会にも共同体として必要な自覚と行動が求められている。

(2) 旗の意味

旗から具体的に学ぶことができる。旗は軍隊で用いられた。きびしい時にも整然と行動できるように旗が用いられた。

荒野の旅ではイスラエルでも旗が立てられた。旅においては共同体として歩まなければならなかったからである。旗のもとに集まっている。それは、目に見えるイスラエルの姿であった。

教会も同様である。地域社会の人々の目に具体的に見える姿で、共同体として教会は働いている。

(3) 幕屋の意味

しかし、教会はただ共同体として統一した行動をとることに終わらない。それだけであったなら、キリストの教会とは言えないからである。

荒野の旅における幕屋の存在がなければならない。教会が教会であるためにはキリストへの信仰において一つとされ、「御国を来たらせたまえ」との祈りににおいて目標を共にしている事実が必要となる。

そこで、旅路の中心にあった幕屋とそのもとに部族が集まった旗という二つの徴から学ぶことができる。これらは地上を信仰共同体として歩む教会の意味を明らかにしている。

4 覚えましょう

(1) イスラエルの人々の共同体全員の人口調査をなさい。 民数記 1 章

イスラエル初めての人口調査である。対象は男子の20歳以上で、このような限定に抵抗を感じないわけではない。しかし、長年に及ぶ旅に出るためには共同体として整える必要があった。そのために実施された人口調査である。

(2) イスラエルの人々は、それぞれ家系の印を描いた旗を掲げて宿営する。

民数記2章

宿営の中心には幕屋があった。主に結ばれた共同体であったためである。その上で部族のシンボルを描いた旗を掲げた。旅を続けるために共同体として整えるためである。

第2章 存在を通して語る 民数記6章1～21節

1 徴となった人々

(1) 共同体への課題

民数記のテーマは共同体であり、第1部（1章～10章10節）は共同体の形成を扱っていた。40年に及ぶ荒野の旅に出かけるにあたり主にある共同体として整えられることが課題であった。民数記の第1部は1～2章で人口調査と各部族の配置を記し、幕屋を中心にした12部族の位置を定めていた。さらに3～4章ではレビ人の人口調査を行ったうえで、彼らの職務を記していた。

このような各部族の人口調査と配置あるいは職務を描いた民数記1～4章は形式的なイスラエル共同体の規定だと言える。

そうだとすると、当然形式にふさわしい内容の規定が続かなければならない。それは主にある共同体の内容であるから、この規定はどのような時にも神の恵みを確認させるものでなければならない。

民数記5章～9章14節は、種々の規定や共同体の長の献げ物を記している。それらはいずれも主にある共同体としての内実を保つために定められていた。その中にナジル人の規定（6章1～21節）がある。

(2) ナジル人と預言者

ナジル人はヘブライ語の「ナーザル」（分離する、聖別する）からきた言葉で、神の恵みを示すために神に選ばれた人あるいは請願をたててナジル人とされた人がいた。

アモス書2章11-12節は、ナジル人を預言者と並べて記している。

- 11 わたしはお前たちの中から預言者を
若者の中からナジル人を起こした。
イスラエルの人々よ、そうではないかと
主は言われる。
- 12 しかし、お前たちはナジル人に酒を飲ませ
預言者に、預言するなと命じた。

神はイスラエルの中から預言者を起こし、ナジル人を起こして職務を与えられる。預言者にとっての使命は神から預かった言葉を人々に語ることであった。ナジル人にとっては酒を飲まないといった節制を守ることによって自らの存在を通して神の恵みを示すことであった。

(3) ナジル人の節制

ナジル人の節制について、聖書は3つを記している。

第1は「ぶどう酒を飲まない」節制である。イスラエルはカナンに定着して以降、日常的にぶどう酒を飲んでいて、ナジル人であっても誓願をたてた期間を過ぎればぶどう酒を飲むことは許されていた。このように一般にぶどう酒を飲む習慣がある中で、ナジル人がぶどう酒を絶ったのは荒野の生活を想起させるためであった。イスラエルは荒野で主にある共同体として形成された。カナンの地に入って、豊かな生活を送る日々であっても主の恵みを生きなければならない。ところで、カナンの地の豊かさのしるしの一つがぶどうでありぶどう酒であった。そこで、ナジル人は荒野で与えられた主の恵みを示すためにぶどう酒を絶った。

第2のしるしとしてナジル人は髪の毛を切らなかった。髪の毛を切らないで伸びるままにしておくことはナジル人のしるしであった。そもそも神の毛には神の力が宿ると考えられていた。だから、ナジル人は髪の毛を切らないで神の与えて下さる力によって生きる人たちであった。

第3の節制は死体に近づかず、触れないことだった。たとえ両親であっても死体に近づくことは許されなかった。死体は汚れていると考えられていたためである。そこで、死体に近づかず、徹底して汚れから離れていることもナジル人の節制となった。



彼はナジル人

(4) 2種類のナジル人

大別して2種類のナジル人がいた。

第1は生まれた時から死ぬまでに及ぶ終生のナジル人である。サムソン・サムエル・バプテスマのヨハネなどは終生のナジル人であった。聖書は終生のナジル人が神の力を受けて特別な働きをしたことを記している。彼らは何よりもナジル人としての節制を守り、自らの存在をもって神の恵みを示した。その上で、神から選ばれた者として特別な働きをした。彼らはナジル人の見本のような存在である。

第2は一定期間のナジル人である。期間としては最小単位が30日間であり、60日とか1年、あるいは7年の場合もあった。彼らは自ら誓願をたててナジル人となった。それは献身と言ってもよい。動機はさまざまであった。神の恵みを感謝してナジル人になった人もいるし、願を訴えるためになった人もあった。彼らはナジル人である間は神の恵みを指し示す存在であった。

2 ナジル人の誓願 民数記6章1～21節

テキストの学びに入る

(1) 誓願を立てる 1～8節

1～8節はナジル人となる誓願について記している。

ところで、「誓願を立てる」のは人間である。人が心を定め、志を立て、誓願を立てる。つまり、ここでは神の選びよりも人間の決意が強調されている。イスラエル人は誰であっても決心によってナジル人となる道が開かれていた。

2～4節にこのようにある。

2 イスラエルの人々に告げてこう言いなさい。

男であれ、女であれ、特別の誓願を立て、主に献身してナジル人となるならば、

3 ぶどう酒も濃い酒も断ち、ぶどう酒の酢も濃い酒の酢も飲まず、ぶどう液は一切飲んではならない。またぶどうの実は、生であれ、干したものであれ食べてはならない。

4 ナジル人である期間中は、ぶどうの木からできるものはすべて、熟さない房も皮も食べてはならない。

2節に「男であれ、女であれ」とある。ナジル人となるのは男性に限られてはいなかった。女性のナジル人もいた。

1～8節で繰り返し使われているのは「聖別」である。ナジル人には「聖別された者」という意味がある。ナジル人の本質はこの「聖別」であった。神から聖別されることによって、神の恵みを示すのがナジル人の務めだった。ところで、ナジル人が聖別された者であるために3つの節制が記されている。ぶどう酒を絶つこと、髪の毛を切らないこと、死体に近づかないことの3つである。

このように節制を記した上で、8節で「ナジル人である期間中、その人は主にささげられた聖なる者である」と結ばれている。

(2) 汚れた場合 9～12節

はからずもナジル人が汚れを受ける場合があった。そのような場合の規定（9～12節）が記されている。

身が汚れてから1週間待つ。1週間たった後に、ナジル人は髪の毛を切る。それはこれまでの期間が無効となったしるしである。そして、8日目に贖いのための献げ物

をする。それは小さな献げ物であった。この小さな献げ物によって汚れを清め、改めてナジル人となる日数を定めて、一歳の雄羊を賠償の献げ物として捧げる。こうして、再びナジル人としての生活が始められた。

ナジル人はしるしとなった人々である。それだけに厳しい節制と汚れを受けた時には厳格な規定が伴っていた。

(3) 誓願の成就 13~20節

誓願が成就する日が来る。

終生のナジル人は違うが、一定期間のナジル人は誓いを立ててナジル人となった。したがって、誓願が成就する日が来る。その日には犠牲が捧げられる。儀式の中でナジル人は髪の毛を切り、和解の献げ物を火で燃やした。

儀式を終えると、その人は普通のイスラエル人に戻り、ぶどう酒を飲むことも許された。

(4) 結び 21節

結びで、「その人は誓願を立てたその誓願どおり、ナジル人であることの規定に従って行わねばならない」と確認している。

3 主の恵みを語る存在

ナジル人の定め（6章1~21節）から学んだ。ナジル人はイスラエルが神の恵みに生かされる共同体であるためのしるしとなった人々である。教えられることをまとめておきたい。

(1) 状況を貫く信仰

まず、ナジル人が起こされた理由である。学者は「ナジル人の存在がイスラエルで重要になったのは荒野の時代ではなく、カナンに入り豊かな生活を送るようになった後であろう」と指摘する。

荒野の40年間にイスラエルは信仰共同体として訓練を受けた。その後、イスラエルは豊かな生活を送るようになる。生活が変わると、様々な状況も変化する。そのような中でただ一つ、変わってはならない事柄があった。それはイスラエルが信仰共同体

である真実である。

そのために一つのしるしとして立てられたのがナジル人である。彼らに課せられた3つの節制がこの事情をよく語っている。ぶどう酒を飲まないことや髪の毛を切らないことは人々に荒野での生活を思い起こさせた。荒野で信仰共同体として訓練を受けた原点を想起させた。

変化する状況を貫いて変わらない信仰共同体として歩んでいく。そのための一つのしるしがナジル人であった。

(2) 恵みを語る存在

第2に注目したいのはナジル人が存在をもって神の恵みを語っていた事実である。預言者は言葉で神の恵みを語った。神は預言者に並んでナジル人を置かれる。ナジル人は語らない。彼らは自分の存在をもって神を語った。

先日、ある求道者から伝道について指摘を受けた。

口で伝道、伝道と言わなければ人が来ないというのはまだ本物ではない。口やかましく言わなくとも、その人の存在を通して教会へ行ってみようと思わせる。それが本当の伝道ではないか。

「求道者だからこそ、私たちキリスト者以上に大切なことが分かる」。そんなこともあるのだと教えられた。

(3) 献身の意味

さらに教えられる大切なことに私たちの献身がある。

終生のナジル人は神の選びだった。それに対して聖書は一定期間のナジル人の道が開かれていたと語っている。彼らにとって大切なことはただ一つ、献身への決意である。

礼拝の献金において「これは献身のしるしです」と祈っている。献金が献身のしるしであると同様に私たちの存在も神の恵みを語る。それは立派な生活をするということではなく、神の恵みに生かされている喜びを通して語ることである。

そのように生きることを献身の内容として教えられる。

(4) 存在と言葉

最後に存在と言葉について触れておきたい。

キリストにおいて存在と言葉は一つだった。存在を離れて言葉だけでは力がない。同様に言葉を離れて存在だけでも的確には伝わらない。

イエスは言われた。

わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。 ヨハネ福音書15章12節

まず、「わたしがあなたがたを愛した」事実がある。イエスの存在がある。それを前提して「互いに愛し合いなさい」と教えられる。イエスにあっては神の恵みを示す存在と言葉が一つとなっている真実を見る。

4 覚えましょう

(3) ナジル人である期間中、その人は主にささげられた聖なる者である。

民数記6章

その人は自らの決意でナジル人となった。ナジル人である間、彼らは節制を守り、自分の存在を通して神の恵みを語った。神は私たちの決意を尊重して用いて下さる。

(4) 彼らがわたしの名をイスラエルの人々の上に置くとき、わたしは彼らを祝福するであろう。 民数記6章

祝祷のモデルとされている聖書の言葉（民数記6章24-26節）がある。それにつづき言葉で祝福するならばその言葉を用いて神は祝福を与えて下さると言われている。心して、祝福の言葉を受けとめる者でありたい。